

グローバルユース防災サミット

Global Youth BOSAI Summit

2023年10月28日(土) 日本時間18時~20時、トルコ時間12時~14時、ドイツ時間11時~13時



Türk Japon Vakfı



土日基金

The Turkish Japanese Foundation



ドイツと日本
Zukunft gestalten
ともに未来へ



尾西食品株式会社

人と地球のいのちを守る



株式会社モリタホールディングス

グローバルユース防災サミット2023

目的

大阪・関西を中心に防災に取り組むユース(10代、20代)が主体となり、世界各国で同じく防災に取り組む「仲間」との交流を通じて互いの国の防災の課題を知り、解決に向けた学びの過程を通じて「世界的共助」の関係性を構築し、「災害に強い未来社会」を形作っていくことを目的としている。

災害大国である我が国には幾多の苦難を力強く乗り越えてきた「強靭さ」があり、次代を担うユースたちがこの「強靭さ」を世界の仲間と共有、活用することにより、若き防災人材の育成と活躍を加速させることを目指している。

また、この活動を通して、従来の主流であった友好親善の都市間交流を、新しく強い防災の概念である「世界的共助」を独自のコンセプトに打ち立て、社会に発信することで、国内外との連携を加速させ、各国各都市におけるユース主体の防災活動の実装につなぐ。



事業の構成

(1) グローバルユース防災サミット(2024年9月)

各国代表による防災の現状と未解決課題についての調査報告。

各国ユースによる自国文化の発信と文化交流プログラム。

全ユースによる課題解決に向けた議論と意見交換、新たな対応策の検討。

サミットの内容をもとに、各国で取り組むべき課題をサミット共同宣言にまとめ、発信。

(2) 次世代 BOSAI フォーラム(2025年2月)

サミットの成果を踏まえ、各国で取り組んできた事柄について報告。

国の枠組みを越えて実現可能な防災活動の提案、議論。

(3) 防災学習

各国での防災の現状を具に調査し、防災のプロとの意見交換を通じて将来を見据えた防災の重要性を学ぶ。

市民の視点で防災に対する理解や対応策を調査。

また、災害を経験した国や都市を訪れ、現状を学ぶと共に、復興のあり方について現地の人々と意見交換。

(4) 定例会

持続発展可能な活動の礎となる組織。趣旨に賛同するユースなら誰でも参加できるオープンなプラットフォーム。

運営主体

主催 グローバルユース防災サミット実行委員会(TEAM EXPO 2025 共創チャレンジ登録 No110)

共催 JICA トルコ事務所、土日基金

事業協力

後援 公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会、駐トルコ日本大使館、駐日トルコ共和国大使館、ドイツ連邦共和国総領事館ほか

助成 大阪市(姉妹都市交流推進事業)、公益財団法人大阪コミュニティ財団、公益財団法人大阪・関西 21 世紀協会(日本万国博覧会記念基金)、こくみん共済 coop

協賛 田中手帳株式会社、株式会社モリタホールディングス、尾西食品株式会社
子ども未来 BOSAI 基金(大阪関西万博を機に防災で未来を支えるファンド)

連携・協力 大阪府市危機管理室、大阪市消防局、大阪府西大阪治水事務所、よんなな防災会、同会学生部、大阪公立大学都市科学・防災研究センター(UReC)、大阪府立水都国際中学校・高等学校、大阪府立いちりつ高等学校、追手門学院大手前中学校、高等学校、学校法人エール学園、クラーク国際高等学院天王寺校、一般社団法人大阪日独協会、DZGO 株式会社、大阪 SGG クラブ、公益財団法人日本消防協会、川辺復興プロジェクトあるく、防災教育施設(津波・高潮ステーション、尻無川水門、京都大学阿武山観測所)ほか

事業内容

「グローバルユース防災サミット 2023」の開催と及びサミットに向けた各国ユースとの国際交流と防災学習。一年を4つのフェーズに分け、各期の目標を明確に定め、一年を通して取り組んだ。

詳細は巻末の事業報告書(一覧)の通り。

2023 年度実績: プログラム数合計 72 回、参加者数 3,484 名(活動者ベース)、8,344 名(事業規模ベース)

【フェーズ 1】(2023 年 4 月～10 月)

ユースの主体的な参画意欲の醸成とチーム作り

- (1)キックオフ(2 回)53 名
- (2)定例会(21 回) 342 名



【フェーズ 2】(6 月～10 月)

国際的視野と防災リテラシーを磨く学習

- (1)スタディツアー(10 回)389 名(大阪市水上消防署他)
- (2)防災学習会(14 回) 282 名(岡山県倉敷市真備町他)
- (3)防災意識調査(2 回) 1,193 名(日本、ドイツ、トルコ他)
- (4)国際交流会(6 回)67 名(ドイツ、トルコ、マウイ他)



【フェーズ 3】(10 月)

「グローバルユース防災サミット 2023」の開催(1 回)186 名

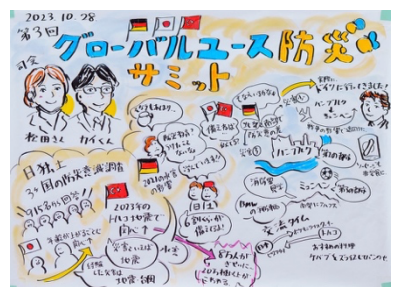
- (1)開会宣言、主催者・共催者挨拶
グローバルユース防災サミット実行委員会
実行委員長 出水 眞由美
副実行委員長 京都大学大学院博士課程 藤田 翔乃
JICA トルコ事務所 所長 田中 優子
土日基金 理事長 ネジャト・ボラ・サヤン
- (2)来賓挨拶(ビデオメッセージ含む)
駐日トルコ共和国大使 コルクット・ギンゲン閣下
駐トルコ共和国日本大使 勝亦 孝彦閣下
堺井 啓公 氏(2025 年日本国際博覧会協会 機運醸成局長)
- (3)話題提供
生田 英輔 氏(大阪公立大学都市科学・防災研究センター 教授)
- (4)各国プレゼンテーション(日本、ドイツ、トルコ)
- (5)文化プログラム&交流タイム、ショートムービー上映
- (6)サミット共同宣言(各国代表による宣言)



【フェーズ 4】(11 月～2024 年 3 月)

サミット成果の発信と共有、新たなパートナー開拓

- (1)「次世代 BOSAI フォーラム」(1 回)136 名
サミットの成果を踏まえ、それぞれの地域において実践した防災活動を市民に向けて発信。
能登半島地震のチャリティ募金活動と、小さな子どもや親子が参加できるワークショップを実施。
- (2)社会(ユース+市民、企業、地域等)への発信(17 回)836 名
Web サイトや SNS を通じた発信のほか、大阪関西万博の共創チャレンジとして万博関連の数々のイベントに出展、登壇。
また、全国で開催される大規模な防災イベント、行事に参加、出展し、広報活動を展開した。
- (3)能登半島地震で被災したユースの支援
自宅が全壊するなど大きな被害を受けた奥能登地域の中学生10名を大阪へ招き、レスパイトプログラムを実施。
被災地での災害ボランティアが行いづらいユースができる支援のあり方を議論し、ユース自らが企画、運営した。



成果・効果

西日本豪雨災害の被災地や防災施設訪問による防災学習のほか、全国的な防災イベントである「ぼうさいこくたい2023」にも参加でき、全国レベルの防災研究やそれらに携わる人材との出会いの機会を得ることができた。

特に、岡山県倉敷市真備町でのスタディツアーでは、メディアでは報道されなかった被害の様子や住民の経験談を目の当たりにしたことや、災害から5年を経過した町の復興がまだまだ途上にあることなど、災害後に生まれた住民の共助の仕組みや復興に向けた努力の様子などを直接学び、感じ取ることができる非常に意義深い機会となった。

同じく浜松市訪問においては市民や企業の募金による大規模な防潮堤が整備されており、現地に身を置いてそのスケール感を実感することにより、インターネットや書物からは感じ取ることができない防災に対する人々の関心の高さと備えの重要性を目の当たりにした。

このように、その場所に赴かないと得られない生きた情報や知識を現地で直接学び取る機会を与えていただいたことで、参加した学生にとっての学びの深化だけでなく、学んだ事柄をより多くの人へ発信することの大切さを感じる機会に恵まれた。こうした経験を積む機会を通して、ユースが主体的にローカルとグローバルの双方の視点から防災を立体的に捉えることができ、さらにその経験を幅広い年代の人々に届けることができた。

事業成果の活用計画

(1)2025 年万博を目指し、2021 年から取り組んできた本活動の成果を世界に向けてアピールし、共に学んできた世界のユースと共に「BOSAI」をより強力に発信することを計画しています。

(2)一方、大阪の各地域においては防災の担い手不足や若手人材の活躍の場が十分ではないという課題があり、優秀な防災人材が集まる組織である当会がその課題解決に貢献することにより、ユース世代の参加を呼び込むことが期待できると考えます。

その意味からも、今年度はサミットの成果発表や企画展を可能な限り多く開催し、地域で防災に取り組む幅広い年代の方との接点づくりに注力しました。「つながろう世界と まもろう未来を」という当会のスローガンを実現するだけでなく、地域防災力の強化の基盤となる多世代間の連携に一層取り組みたいと考えている。

参加者、カウンターパートからの評価

(1)参加学生、教員、保護者への聞き取り内容(抜粋)

①国内参加者

・今年もドイツからのライブ配信に参加したが、昨年ハンブルク市消防局の方に聞いていた話がよりリアルに理解できた。(高校生)

・トルコのユースとリアルに話せて楽しかった。大きな地震があつて怖かったと思うが、前を向いて伝えてくれたことに感動した。(小学生、中学生)

・学校ではこういう機会を提供できないので、参加できてよかった。防災と国際交流を関連付けた取り組みは他に好例がないと思う。万博まで一緒にしたい。(中高一貫校教員)

・子どもにとっての防災の始まりが国際交流であってもいいのだと感じた。そういえば世界中どこにでも災害があるのだから防災で世界をつなぐことは意義があると感じた。防災のイメージが親世代とは違いポジティブだったことに感動した。親もメンバーに入りたい。(保護者)

②海外参加者

・今年ドイツに実際に来てくれたことが嬉しかった。日本のユースとライブで話せたことが意義深かった。(ハンブルク市消防局職員)

・ドイツでは防災を熱心に考えている若者が日本に比べて少ないと感じた。義勇消防団について興味深く聞いてもらい、自分たちの歴史を誇らしく思った。(ハンブルク市消防博物館艦長)

・トルコ大地震から一年も経たない時期にサミットができるか迷ったが、被災の程度が軽かったアンカラの学生たちが率先してトルコ国内の様子を伝えたいと言ってくれたので開催を決意できた。昨年の地震の際にいち早く支援のビデオメッセージをくれたことに対し、今回は年始の能登半島地震の被災者に向けたビデオメッセージを送った。土日両国は災害を乗り越えよう。(土日基金職員)



(2)事前学習会、サミット2023、フォーラム2024に参加した市民等への聞き取り内容(抜粋)

・中高生が自分たちの目線で地域の防災の現状を丁寧に調査し、住民と共に地域全体の防災力を向上させようとする活動を詳細に知ることができた。(事前学習会参加者)

・災害は日本だけの課題でなく、もはや地球全体で考え、取り組む重要課題になっていることを認識できる意義深いサミットであった。昨年地震を経験したトルコの学生たちからは懸命の救援活動に力を尽くしてくれた日本をはじめと

する世界各国の人々への深い感謝の気持ちが垣間見え、胸が熱くなった。被災国、支援国という立場を超えてこんな若い学生たちが懸命に世界を繋ごうとする姿にも毎年感動している。(サミット参加者)

・中高生がどの程度自発的に防災活動をしているのか知りたくて、サミットとフォーラムに参加した。先生やプロボノの大人たちは遠くから彼らを見守る役割に徹しており、大学生と思われるメンバーが中高生に寄り添い、自分たちより若い世代のメンバーに経験の機会を与えているようなほのぼのとした空気感を感じた。学生たちの発表を見守る大人たちの中には私のような高齢者も多かったが、若い世代が万博でどんな活躍してくれるのか楽しみで仕方ない。(サミット、フォーラム参加者)

今後の課題

(1)ユースの成長に合わせた持続かつ発展可能な組織づくり

実行委員会メンバーである中学生、高校生、大学生それぞれが定期試験や学校行事をはじめ、他の活動などで年間を通じて多忙であり、全員参加の活動を設定することが非常に難しく感じた。

また、進級、進学、受験、就職等により、活動の継続が困難になるメンバーに対しては、オンラインや LINE グループの活用により、良好な関係の継続を図る必要があり、可能な限り個別に連絡を取ったり、ユース間のネットワークを駆使するなど試行錯誤を繰り返した。

(2)地元ユース主導による自由で強い組織づくり

地元大阪で万博が開催されることが決定し、それまで個別に防災活動に取り組んできた団体が集まり、2021年に組織を立ち上げた。当時は10名程度の規模であった実行委員会が年々仲間を増やし、現在は40名程度の組織に育っている。新たに活動に関心を持ち、仲間に迎え入れたメンバーに対して、従来のメンバーだけに偏らないオープンかつフレキシブルな組織であることを大切に思うユースが数多く、大学生、院生、社会人らの年長者が舵取りを行いながら、大人やプロボノに依存しすぎない組織に育ててくれている。

(3)2025年万博に向けた活動の加速

防災学習の中で、海外との交流を契機に、防災のあり方や考え方自体にも文化や歴史が色濃く反映されていることを知り、防災という領域がグローバルな視野からも非常に興味深くまた重要なテーマであることをユースが実感し、活動に関わっている点が本会の強みであると考えている。

万博の開催を来年に控え、これまで交流のあった国のユースと共にわが国が「BOSAI」で世界に向けた発信を行う日が近づいており、ユース及び支援者が一丸となり、5年間の活動の集大成としてやり遂げたいと考えている。

以上

大阪公立大学 都市科学・防災研究センター ニュースレター
2023年12月 vol.5



Osaka Metropolitan University
Urban Resilience Research Center

Newsletter

vol.05
[2023年12月]
発行
大阪公立大学
都市科学・防災研究センター

Topic.01

グローバルユース防災サミット2023報告

都市科学・防災研究センター 教授 生田 英輔



グローバルユース防災サミット2023は2023年10月28日(土)の18時~20時にATCアジア太平洋トレードセンターで開催されました。参加者は日本側が59名、トルコ側が48名でした。主催はグローバルユース防災サミット実行委員会、共催はJICAトルコ事務所、土日基金、後援はドイツ連邦共和国総領事館、駐トルコ日本大使館、駐トルコ共和国大使館、UReCは後援機関となります。

サミット本番までに、大阪府津波・高潮ステーション、尻無川水門、京都大学阿武山観測所の見学や、UReC三田村副所長による2023年2月のトルコ・シリア大地震の解説講義などで事前学習を実施しました。

司会進行は大学生と高校生、同時通訳にも大学生が含まれるユース主体のサミットになります。

開会宣言ののち、JICAトルコ事務所所長、2025年国際博覧会協会機運醸成局長の挨拶、生田による趣旨説明がありました。生田は本サミットのアドバイザーとなっています。

プレゼンテーションの時間では、大阪府立水都国際中学校・高等学校防災部のメンバーからサミット参加の3か国で実施した防災意識調査の

報告、ドイツに関しては文部科学省トビタテ!留学JAPANプログラムによるドイツ防災探求活動の報告、トルコに関してはチャンクールのÇankırı TOBB Science High Schoolからトルコ・シリア大地震に関連する現地の状況報告、及び世界各国からの救援隊の活動への感謝と、早魃や山火事を経験した地域での植林や復興活動についての報告がありました。

交流プログラムの時間では、日本のアニメキャラクターを使用しつつ、アレルギー対応・ハラル対応の災害備蓄にも適した菓子類の紹介、トルコ名産品のピスタチオの紹介があり、参加者はその味を楽しみました。また、各国の文化を知ることによって日本の画像生成AIによるアート作品の披露もありました。料理、音楽、アニメなどユースの興味の尽きない話題で活発な情報交換もありました。

最後にグローバルユース防災サミット2023共同宣言と生田による総評があり、サミットは無事終了しました。



大阪公立大学都市科学・防災研究センター (UReC)のニュースレターのトピックに掲載されました。